山梨県立大学
【医療】

急性期病院の一般病棟における認知症ケアに関する看護師間の対話の要素と構造
～認知症看護認定看護師へのインタビューを通して～

塩津裕也　渡邊裕子　小山尚美　（山梨県立大学　看護学部）

【今後の展開 商品イメージ応用できる分野】
看護師間の「対話」を活かした教育・人材育成への展開

目　的

認知症看護認定看護師(以下，DCN)へのインタビューを通して急性期病院の一般病棟における認知症ケアに関して看護師2者間で行われる対話の要素と構造を明らかにする

用語の定義

対話：看護師のみで構成された2者間での認知症ケアに関する語り合いから個人の気づきが生まれる相互的な関わり

研究方法

➢ 対象
認知症高齢者の入院を日常的に受け入れている一般病棟に所属し，かつ，DCNとして3年以上の経験がある者　5名

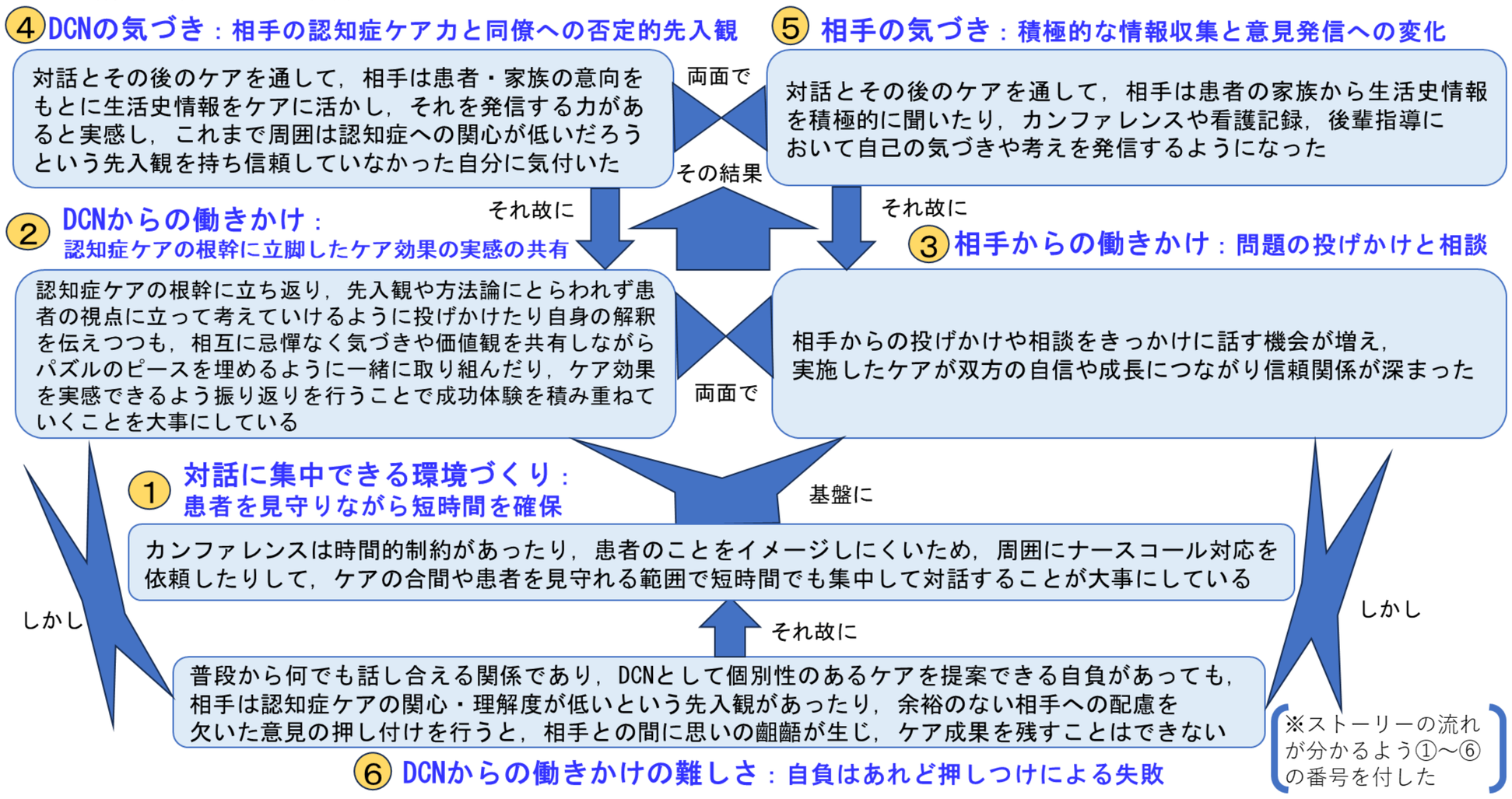
➢ データ収集方法
インタビューガイドに基づいた個別の半構造化面接を実施した．自身が経験した認知症ケアに関する最も印象深い対話をひとつ想起してもらい，対話の場面，対話相手との関係性，対話の内容，対話中の態度(聞き方・話し方)，対話する上で大切にしていることについて自由に語ってもらった．データ収集期間は令和6年4月～7月であった．

➢ 分析方法
質的統合法（KJ法）を用いた．まず，各研究参加者の「急性期病院の一般病棟における認知症ケアに関して看護師2者間で行われる対話」に関連する記述を抽出し，1枚ごとのラベルが「志」を持つよう元ラベルを作成した．次に，「志」の類似性に着目してグループ編成を行い，集まった元ラベルの意味内容を読み取り，全体感を一文で表現し新たなラベルを作成した．研究参加者ごと2段階のグループ編成後，全ての研究参加者の2段階のラベルを集め統合分析の元ラベルとし，各ラベルに類似性がないと判断できるまでグループ編成を繰り返し，5～7枚になった時点で最終ラベルとした．最後に，最終ラベル同士の関係性に着目し，その構造を関係記号，添え言葉，シンボルマークを用いて空間配置図を記した．

➢ 倫理的配慮
研究対象者には研究目的と方法，研究参加・同意撤回の自由，個人情報の保護，結果の公表について口頭および文書にて説明し書面による同意を得た．本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した．

結　果

研究参加者5名は，看護師経験10年以上20年未満が4名，10年未満が1名で，DCN経験は全員が3年以上～5年未満であった．対話相手は後輩が4名，同年代が1名であった．各研究参加者の元ラベルは64～83枚で，研究参加者ごと個別に2段階までグループ編成を行い，その合計169枚を元ラベルとして統合分析を行い，8段階のグループ編成を経て6枚の最終ラベルとなった．



考　察

➢ 対話の基盤となる環境づくり
急性期病院では時間的・環境的な制約が存在するからこそ，限られた時間で意識的に対話する機会を作っていくことが重要である．看護師は五感を用いて患者情報を感じ取り臨床判断に活用しているため，認知症高齢者を見守れる環境の確保は，認知症高齢者の言動や表情といった視覚情報を共有でき，双方の気づきや考えを発信し合える対話の基盤になっている．

➢ 対話における相互の働きかけとそこから生まれる相互作用
相互の働きかけによって，研究参加者は相手の言動や反応から気づきを得ることでDCNとしての振り返りの機会や成長につながり，相手はDCNによる働きかけによる気づきを得て認知症高齢者に対する思考が深まったり，認知症ケアに関する姿勢を肯定的に変化させるという循環的な相互作用が生じており，このサイクルが対話を発展させていくと考える．

➢ 「自己の姿勢を問い続ける」好循環の対話を生み出す心構え
相手への無意識の思い込み・偏見があると対話は成立し得ないため，自身の知識や思考，価値観を相手の視点から見つめ直し，自身の当たり前を押し付けない姿勢が求められる．また，相手への働きかけの難しさに気づき，その難しさは相手とのどのような「異」が原因なのか，対話の中で相手の温度を感じ取りながら理解しようとすることが重要である．

➢ 今後の課題
インタビューで語られた相手との関係性や相手の気づきは，研究参加者が捉えたものであり，相手の認識とは乖離が生じている可能性がある．対話は双方向的なものであるため，今後は双方の語りを対象にした追究が求められる．

発表に関連し，開示すべきCOI関係にある企業などはありません．なお，本研究は山梨県立大学看護実践開発研究センター 松野・望月看護研究費助成金を受けて実施しました．